

腸チフス予防接種に続発せる両側正中神経 麻痺の一例

昭和29年8月17日 受付

信州大学医学部第一外科教室 (主任 星子教授)

立 木 光

A Case of the Paralysis of Median Nerves of Both Sides after Injection of Typhoid Vaccine

Akira TATSUKI

1st Department of Surgery, Faculty of Medicine, Shinsu University
(Director: Prof. N. Hoshiko)

Patient is a boy of 14 years old. Paralysis occurred 2 days after injection. Some discussions were made, and it was concluded that in this case a sort of allergic reaction was the cause.

I. 緒 言

最近腸チフス予防接種を受けた少年が、注射後第2日目に、両側正中神経麻痺を来した一例を経験したので此処に其の概要を報告し、總ての人が受けねばならない此の種予防接種に、稀ではあるが、かゝる偶発症のある事を述べ、若干の文献的考察を行つて見たいと思ふ。

II. 症 例

14才の男子、家族歴に特記すべきものは無い。既往歴では4年前に虫垂切除術を受け、其の後腸管癒着の為に再手術を行つた他、特別の疾患を識らない。チフスの予防接種は昨年3回受けて居るが何等異常は認めない。本年4月23日本年度第一回目の腸チフス予防接種(此の注射液は、腸チフス、パラチフスA、パラチフスB、の混合液である)を0.1cc 皮内接種法に依り、左側上腕伸側に受けた。当日は別段異常を認めなかつたが、翌々日の25日に到り、遊戯中背部に緊張感があり、両手がシビレて来たのに気付いた。自転車を押す事が出来なくなり、友人に送つて貰ひ帰宅、安静にしていた。然し背部の緊張感は漸次増強しシビレた両手は握る事が出来ず、又指を伸展する事も不可能となつた。此の間、熱感、疼痛、嘔気、嘔吐等は無く、唯冷汗があつたと訴えている。

暫らくして、某病院を訪れ診察を受けた処、神経痛と云はれ静脉注射及臀部に注射を受けた。一方気分は悪く無かつたので通学はしていたが、字を書く事は全く不可能であつた。

約一週間の通院加療を受けたが軽快の様子が無いので、5月26日我々の外科を訪れた。

当時の所見としては、体格、栄養中等度、体温37.2°C、脉膊規則正しく緊張良好であつて、血液検査

では

赤血球数	462×10 ⁴
白血球数	6200
ヘモグロビン	98% (ザーリー)

白血球百分率は

エオジン好性細胞	28%
桿状核	3%
分葉核	45%
リンパ球	22%
単核細胞	2%

で著明なエオジン好性細胞の増多を認めた。尿、糞便、の検査には異常を認めない。

両手は所謂「猿手」をなし、軽度の筋萎縮を認め、指の運動は屈曲伸展共に殆んど不能、握力は左右共に零、又両側橈骨、反射消失、二頭筋反射微弱であり、運動障害は同時に両手関節にも見られる。爪の栄養障害は見られない。

知覚障害は掌側では拇指、示指、中指の全部及び環指の橈側半部、背側では示指の第Ⅱ節及び環指の第Ⅲ節迄の末梢部分に痛覚過敏、触覚鈍麻が認められた。(写真 1. 2)

両側正中神経麻痺の診断の下に、感電気マツサーヂとワゴスチグミンの注射を行つて、約2ヶ月を経過したが、指の運動は可成り恢復し、殊に右側の拇指、環指、小指は殆んど正常に近く伸展可能となり、握力は零であつたのが、右側2、左側6、と成り通学时抱えて居た靴も手に持つて通学出来る様になつた。

又箸の使用も可能となつた。

血液像に於けるエオジン好性細胞は22%、知覚障害も軽度となり、橈骨反射も正常に戻つて居り比較的良好の経過を辿つている。(写真 3. 4)

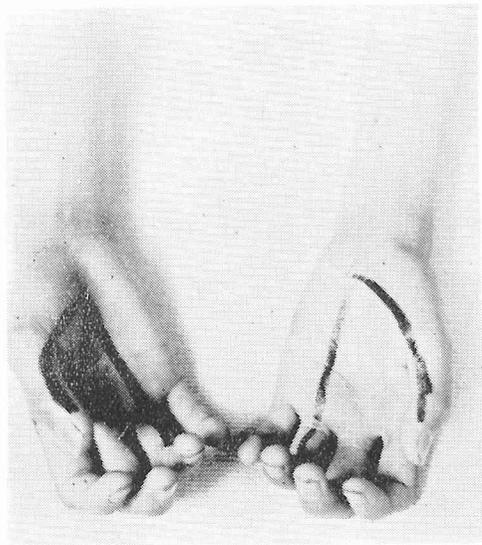


写真 1

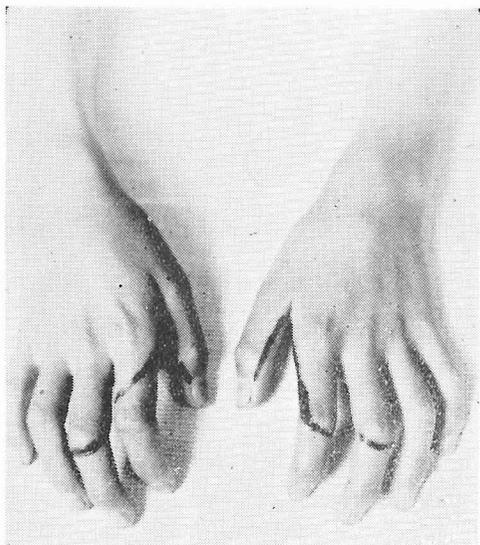


写真 2

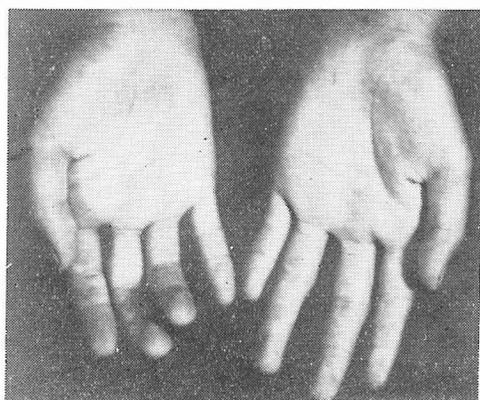


写真 3

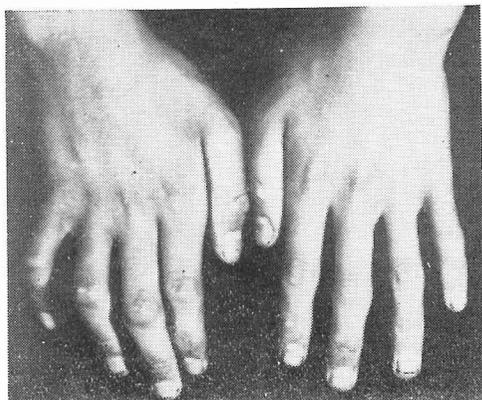


写真 4

Ⅲ. 考 察

腸チフス予防接種に依る偶発症の報告は比較的少ないものである。

私の探し得た49例について見れば

眼障害を来せるものが最も多く30例に達して居る。

次いで

異常発疹を来せる4例

脊髄炎を起せる4例

顆粒細胞減少症を来した2例

更に、反廻神経麻痺、三叉神経麻痺、下腿痠痛を来せる例、其の他となつている。

又昭和10年奥村氏の報告は、注射後右足に脱力感があり、次いで上下肢は運動不能に陥り、続いて嚥下困

難を来し、遂に死亡した例を報告している。

尙予防注射が刺戟となり、潜伏していた疾患を再発及至誘発した例も報告されている、

是等の偶発症の原因に関しては、諸家により、色々な機転が考えられて居るが、尙定説は無い様である。

即ち、昭和6年北沢氏は、第2回目の注射の翌日より発病せる、定型的両眼視神経炎及び右眼外直筋麻痺の例を報告し、予防注射が、或種の刺戟となり、漿液性脳膜炎様疾患を誘発したものであらうと想像し。

前述の奥村氏の例、及び同年の白井氏の報告した、第2回目の注射後翌々日突然右眼に外旋神経麻痺を来せる例は、兩者とも其の原因を予防注射液中の毒素に依る末梢神経炎ならんと結論している。

更に昭和11年、林氏は注射数時間後に起れる反廻神経麻痺の例を、昭和12年、新谷氏は第2回注射後7日目と28日に突然両眼に高度の視力障害を来し、後急性脊髄炎を起し漸次増悪、9ヶ月後に死亡せる例を報告し、何れもチフスワクチン注射に因る、免疫性中毒であるかと述べている。

又、昭和24年、原田氏は調節不全麻痺の例を報告し、予防注射に因る一種の毒血症が調節核を撰択的に犯したものであらうと考えた。

昭和25年井上氏は注射後に見られた、急性右眼失明の一例が、ワクチンに因る、アレルギー乃至アナフィラキシーに因るものと判定している。

同年下田氏は中心性網膜炎の一例を報告し、原因をアレルギー変化と考え、又、同年、井上氏は視神経乳頭炎のものにレスタミンを注射し、視力1.0に迄恢復した例を報告、此の原因をアレルギーに因る炎症性浮腫の為に神経繊維が機能障害を起したものと考えた。

同様に昭和24年には柴田氏が、結膜下炎の例をアレルギー性疾患と考え、ビタミンB₆の注射を行つて、比較的効果を取めたと報じている。

昭和26年には、当教室金原が、右下腿瘰癧並びに右眼失明の一例を、一種のアレルギー反応を示した興味ある一例として報告した。更に昭和28年には、原田氏も、アレルギーに因ると思はれる球後視神経炎を報告している。

比処に報告する症例は第一回目の腸チフス予防接種後2日目に急に発病したものであり、特異所見として

は、血液像に著明なエオジン好性細胞増多を認める他、全身的に何等の異常を認めず、局所々見は既述の如くであつて、恐らく腸チフス予防接種に依り一種のアレルギー反応を起したものと考へる。

IV. 結 語

14才の男子で、本年度第一回のチフス予防接種後2日目に起れる、両側正中神経麻痺の一例を報告し、若干の文献的考察を加え、チフス予防接種に因る一種のアレルギー反応を起したものと考えた。

擧筆するに当り、星子教授の御校閲を深謝致します。尚本論文の概要は、昭和29年6月25日第6回中信地区医学会に於て報告した。

文 献

原田：眼科臨牀医報 47:1, 58, 昭, 28. 金原：臨牀外科 6:6, 281, 昭, 26. 柴田：臨牀眼科 4:7, 281, 昭, 25. 田地野：眼科臨牀医報 45:1, 26, 昭, 26. 原田：眼科臨牀医報 43:12, 418, 昭, 24, 原田：// 43:9, 296, 昭, 24, 井上：// 45:4, 242, 昭, 26 下田：// 44:8, 381, 昭, 25, 井上：日本眼科紀要 1:9, 355, 昭, 25. 栗原：日本耳鼻咽喉科学会々報 51:6, 202, 昭, 23. 一ノ瀬：皮膚泌尿器科雑誌 47:2, 161, 昭, 15. 新谷：倉敷中央病院年報 11:2, 288, 昭, 12. 林：大坂医事新誌 7:3, 372, 昭, 11, 白井：眼科臨牀医報 30:11, 912, 昭, 10. 奥村：実地医家と臨床 12:3, 264, 昭, 10. 北沢：眼科臨牀医報 26:12, 986, 昭, 6.

乳児のビールス性肝炎

Viral Hepatitis in Early Infancy.

Report of Three Fatal Case in Siblings Simulating Biliary Atresia

R. B. Scott et al, *Pediat.* 13, 5:447, 1954

黄疸を伴つて生後4週、1週、4ヶ月に発病し、その後夫々3ヶ月、4ヶ月、9ヶ月で死亡した致命的な肝炎の同胞3例を報告している。臨床検査で白血球減少、軽度の貧血、出血、凝固時間は正常、黄疸指数100以上尿ビリルビン(+)、ウロビリノーゲンは一例のみ(-)、梅毒血清反応(-)であつた。手術の結果は一例のみに胆道閉塞があり他は正常であつた。剖検所見は3例共ビールス性肝炎の臨床診断と一致していた。その母と生きている2人の子供は臨床検査で肝機能障害があつた。胆道閉塞と臨床的に思われたのは先天性ビールス性肝炎の為であらう。ビールスの胎盤感染は非常に稀である。乳児の黄疸の鑑別診断にビールス性肝炎を考慮に入れないと試験的開腹術の様な外科的処置にたえられずこれ等の症例のように死亡する。

(信大小児科 青木美典抄)